教育最前線　連載29

●高等学校における自転車安全指導研修会

プレドライバー教育としての具体的な自転車安全教育を普及

日本交通安全教育普及協会の亀田清人主幹による講義

一般財団法人 日本交通安全教育普及協会では平成24年度、高等学校における自転車教育を、自動車との安全な共存をめざしたプレドライバー教育と位置づけ、高校の交通安全指導担当教員を対象にした自転車安全指導研修会を各地で開催している。自転車による交通事故が社会問題化している中で、交通安全指導担当教員の自転車安全教育に関する知識や技術の向上を図ることが同研修会の目的である。

7月2日、4日には兵庫県教育委員会との共催で実施。兵庫県は高校数が多いことから、網干自動車教習所（姫路市）、アールドライバーズ西北（西宮市）の2ヵ所の自動車教習所で開催し、合計91名の先生方が参加した。今回は西宮市で行われた研修会を紹介する。

自転車事故の傾向や事故事例を把握する

最初は、「自動車と共存できる自転車の安全な通行の仕方～高校生を自転車事故から守るための指導」というテーマの講義。日本交通安全教育普及協会の亀田清人主幹が、高校生の自転車事故の傾向や事故事例について詳しく説明していく。通学中の自転車事故発生率が63・0％と高くなっていること、自転車事故の63・3％は生徒側に「違反あり」、30日以内の高校生の自転車乗用中の交通事故死者数は37人（24時間以内は28人）で原付乗車中の2倍以上になっているという統計を示した。

「自転車事故など生徒の事故を防止するために必要なのは、『命の大切さ』を生徒たちに理解してもらうこと。その上で、自分の命を自分で守るためには、危険予測トレーニングなどを通じて危険感受性を高めていくことが重要です。こうした点をふまえて、日々の交通安全教育に取り組んでいただきたい」と亀田主幹は強調した。

事故再現を通じて事故の怖さを伝える

実技は「自転車の事故再現と自転車の通行方法について」。アールドライバーズ西北の教習指導員が、日本交通安全教育普及協会が作成した指導マニュアルに従って指導を行った。

その1つが事故再現。見通しの悪い交差点などで、クルマの前に飛び出したらどうなるか、段ボール箱を自転車に見立てて出会い頭事故の再現を行う。クルマは約50km／hで走行。目の前に段ボール箱が飛び出してきた時にブレーキをかけるが間に合わず、衝突してしまった。クルマとぶつかった時の衝撃力を参加者は目と耳で感じる。さらに、教習指導員が運転する自転車が左折するクルマに巻き込まれる事故の再現も行われた。こうした事故再現は、高校生に事故の怖さを与えると同時に、どうしたら事故が防げるかを考えるきっかけになると参加者に伝えた。

出会い頭事故の再現。段ボールが飛び出してから、教習指導員がブレーキをかけても間に合わない

教習指導員による左折巻き込み事故の再現

事故を防止するための運転方法を身につける

次に、見通しの悪い交差点での自転車の通行方法。参加者全員が自転車に乗り、見通しの悪い交差点を一時停止せず、そのままの勢いで左折する。その状況で、左折直前に左右をよく観ても、スピードが出ているため、周囲の状況がほとんど把握できないことを体験してもらう。その後、正しい通行方法を全員が実践。停止線の手前で一時停止し、見通しのきく場所で再度止まって左右と後方の安全確認をしてから、交差点を通過してもらった。

実技の最後は、緊急事態に対応した停止能力の確認。参加者に自転車を全力でこいでもらう（20km／h近くの速度を出してもらう）。その後、前方に立っている教習指導員の旗の合図で前後輪のブレーキを同時にかけ、できるだけ短い距離で停止。教習指導員は参加者に停止距離がどれだけかかったかを伝える（停止距離は4・5～9m）。こうした実験によって、急ブレーキをかけると自転車のコントロールが難しくなること、危険を発見してブレーキをかけても、自転車はすぐに止まれないことを高校生が実感しやすいと伝えた。

見通しの悪い交差点で一時停止しない時と、一時停止した時で、周囲の状況の見え方を比べてもらう

旗の合図で急ブレーキをかけて停止してもらう

自転車安全学習の進め方について討議

再び教室に戻り、班別協議へと移る。参加者48名は6つのグループに分かれ、「ホームルーム等における自転車安全学習の進め方」というテーマで討議を行った。

グループ内で、各々が自校の交通安全指導の課題を発表し、高校にとってどのような取組みが必要か意見を交換。先生方からは、「生徒に交通ルールを正しく理解してもらうことが重要」「生徒にアンケートをとり、通学路の危険箇所を共有しなければならない」「生徒の意識の部分を変えるには、今回のような参加体験型の研修を体験してもらうことが有効」といった意見が出された。討議の中では、ホームルーム等において、「Safety Action 21※」がどのように活用できるかについても話し合われた。

「多くの高校で交通安全講話は実施されていますが、それが自転車の事故防止に結びついていないという現状もあります。だから、参加体験型の研修が必要なのです。実技については、学校だけで実施するのが難しい状況もあるでしょう。その際は、近隣の自動車教習所に相談してみるという方法もあります。生徒の命を守るためには、まず先生方がアクションを起こすことが大切です」と亀田主幹が締めくくり、研修会は終了した。

班別協議では参加者同士で活発な意見交換が行われた

※Safety Action 21＝免許取得年齢に達する高校生を対象に、ホームルームなどの授業の中で生涯を通してより良い交通社会人となるための体系的な交通安全教育を行えるように、一般社団法人 日本自動車工業会が開発したテキスト。指導資料と生徒用資料は以下の日本自動車工業会のホームページからダウンロード可能。　http://www.jama.or.jp/safe/safety/

NEWS REVIEW

1 ●文部科学省
生徒の安全な通学のための教育教材DVD

文部科学省は中学生・高校生の通学時などの事故防止を目的とした教育教材DVD「安全な通学を考える～加害者にもならない～」を企画・制作し、今年3月、全国すべての中学校・高校に配付した。

このDVDは、自転車を利用する生徒が自分の乗り方について見直し、社会の安全を守る意識を深めてもらうことをねらいとしている。例えば、見通しの悪い交差点や一時停止標識のある交差点を定点観測した映像を見て、そこを通行する自転車利用者の安全確認や一時停止の仕方など、「安全な自転車利用」「安全でない自転車利用」を観察し、「自分の乗り方は安全か？」考えてもらえるようになっている。また、自転車用の危険予測トレーニングとして18の交通場面（動画）も用意されている。さらに、子どもや高齢者などから自転車がどのように見えているかを映像で示し、他者の視点を体感することで様々な立場から安全を考えることができるように工夫されている。

DVDには、「指導のポイント」や「ワークシート」も収録されているので、中学校・高校の先生方はホームルームや授業で活用してほしい。

2 ●第45回二輪車安全運転全国大会
全国から選ばれたライダーが安全運転技能を競い合う

8月4、5日の両日、鈴鹿サーキット交通教育センターにて「第45回二輪車安全運転全国大会」が開催された（主催：（財）全日本交通安全協会二輪車安全運転推進委員会）。同大会は、二輪運転者の安全運転技能と交通マナーの向上を図ることにより、交通事故を防止することを目的として、昭和43年から毎年開催されている。競技は、法規履行走行と技能走行。女性クラス（50cc）、高校生等クラス（50cc）、一般Aクラス（400cc）、一般B クラス（1100cc）の4クラスに分かれて、全国47都道府県の代表選手187名が各クラスの個人賞と各クラスの得点を合計した総合得点で団体賞を競った。

大会2日目には、記念式典が国際レーシングコースにて開催され、出場選手全員によるパレードが行われた。大会成績は、団体優勝が東京都、2位・埼玉県、3位・千葉県。個人賞は、女性クラス・小杉幸枝さん（千葉県）、高校生等クラス・上野真之亮さん（長崎県）、一般Aクラス・西村大希さん（東京都）、一般Bクラス・大木隆次さん（埼玉県）が優勝した。

高校生等クラスの上野さんは「まだバイクに乗り始めて間もない自分が、まさか優勝できるとは思わなかった。これからも、さらに安全運転を心がけていきたい」と喜びを語った。